HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キツネが友達だったころ
Author(s)	池田, 貴子; 石川, 芳夏; 藤田, 諒子
Description	科学研究費助成事業(課題番号：JP19K14339, 研究代表者：池田貴子)の助成により制作
Issue Date	2021-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85336
Type	learning object
File Information	Fox.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

THE TALE OF URBAN FOXES

キツネが友達だったころ

作

石川 芳夏・藤田 諒子

池田 貴子

THE TALE OF URBAN FOXES

キツネが友達だったころ

作

石川 芳夏・藤田 諒子

池田 貴子

第一章

ここは札幌。
みんなが憧れる大きな街です。

コン吉は 長い旅を終えて
ようやくこの街にたどりつきました。

「 ふんふん…ここが札幌駅。
　ここが大通公園か…きれいな街だなあ…。
　大きな森もあって きもちいい！」

今は秋。

コン吉は ふるさとから独り立ちして
ひっこしてきたのでした。

おなかがすいたコン吉は
さっそく食事をはじめました。

「 都会のネズミは ひと味ちがうなあ。
　おいしい おいしい 」

コン吉は 街中をお散歩して
ネズミのたくさんいる畑や
甘い実のなる樹をさがしてまわりました。

冬になりました。

すっかり札幌での生活に慣れたコン吉は
この街で生まれ育った女の子と仲良くなりました。

スズちゃんです。

コン吉は スズちゃんがだいすきでした。

ある日、コン吉とスズちゃんがお散歩していると
スズちゃんが言いました。

「 ねえねえ コン吉くん、こっちにきて 」

ついていくと 街の近くの森のなかに
りっぱな巣穴がありました。

「 ここはね、おばあちゃんが作ったおうちなの。
お母さんもわたしも ここで育ったのよ。
わたし、コン吉くんといっしょに
ここで暮らしたいの 」

「 スズちゃん、それって… 」

「 うん。結婚しましょう 」

コン吉は おおよろこびしました。
だいすきなスズちゃんと家族になれるのです。

「 うれしい！ぼく うれしいよ !!
スズちゃんだいすき !! 」

ふたりは春に向けて
せっせと巣穴の掃除をはじめました。

春になりました。

コン吉とスズに 4匹の子ギツネが生まれました。

スズは 子ギツネたちのおもちゃに と
人間の家の庭からもってきた
小さなサンダルをあげました。

子ギツネたちは かみついてみたり
けとばしてみたりして おおはしゃぎです。

サンダルは 子ギツネたちの宝物になりました。

今日も 子ギツネたちは 森で元気に遊んでいます。
とっても楽しそう。

コン太とスズは
遠くから見守っています。

そこへ 人間の家族がやってきました。

「 わあ キツネだよ。かわいいねえ 」

「 そうだ。このお菓子あげてみようよ。
　きっと喜んでくれるよ！」

と ポテトチップスを投げてよこしました。

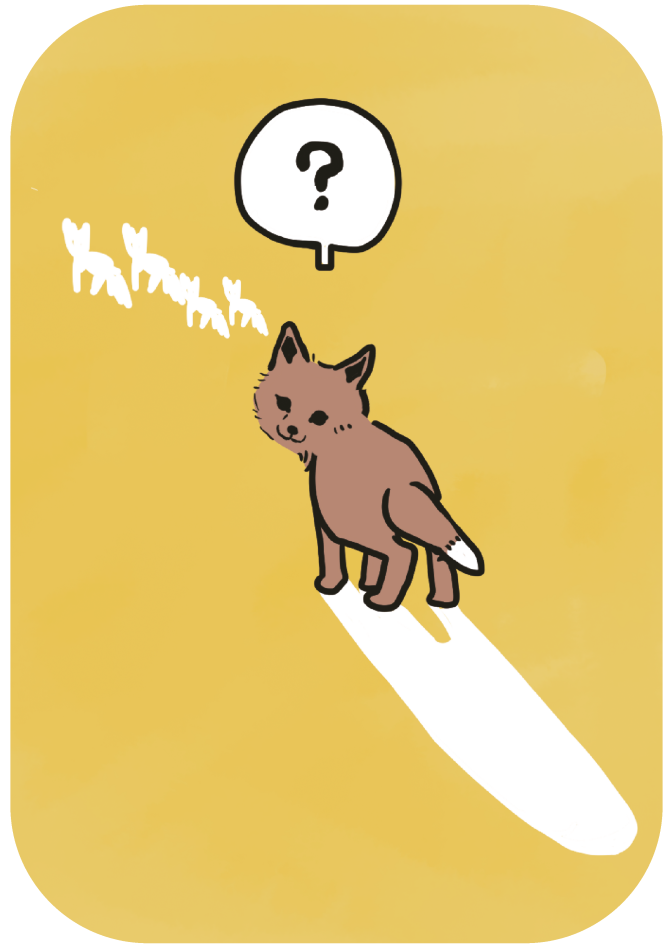
子ギツネたちは すぐにとびつこうとしましたが
スズがあわてて きびしく言いました。

「 だめ !!
キツネは キツネの食べ物しか
食べちゃいけないのよ 」

子ギツネたちは しぶしぶあきらめて
おうちへ帰りました。

一番下のランだけは
なごりおしそうに じっと人間のお菓子をみつめて
小さな声でつぶやきました。

「 いつも わたしのことをかわいがってくれる
　人間のおじさんは
　おいしいものを おなかいっぱいくれるよ。
　とってもいい人だもの 」



子ギツネたちが巣穴にもどると
そこへ小さな人間の女の子がやってきました。

子ギツネたちがサンダルであそんでいるのを見て
女の子が言いました。

「 あった！」

どうやら この女の子のものだったようです。

「 ねえ、それ返してよ！」

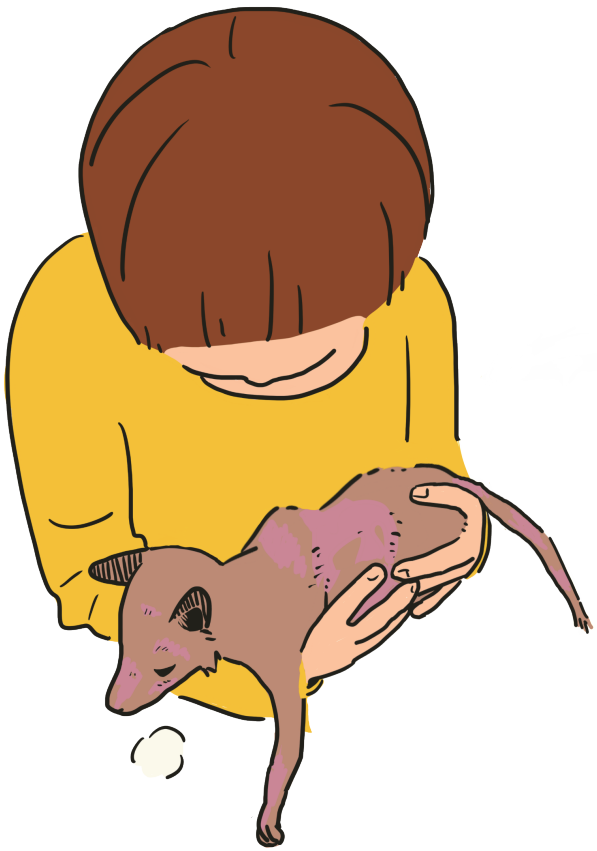
「 え〜　これはもうぼくたちのだよ 」
「 けとばしたときの転がり方がおもしろいんだ。
　ほら！」

まだ茶色いしっぽを くるんとひるがえして
子ギツネたちは得意げに
サンダルを転がして見せました。

人間の女の子は、そのサンダルが
とってもお気に入りだったのですが
子ギツネたちがずいぶん楽しそうに遊ぶので
ゆずってあげることにしました。

彼女の名前は ハルちゃん。

子ギツネたちとハルちゃんは
それから 大の仲良しになりました。



ある日のことです。

ハルちゃんが ぼろぼろになったランを抱いて
走ってきました。

「 橋の下に たおれていたの！」

お母さんギツネのスズが
びっくりして言いました。

「 どうしたの！そんなにやせて…
　毛皮が ぼろぼろじゃない !! 」

「 いたいよう…かゆいよう… 」

みんなで病院に連れていきましたが
どんどん具合が悪くなっていきます。

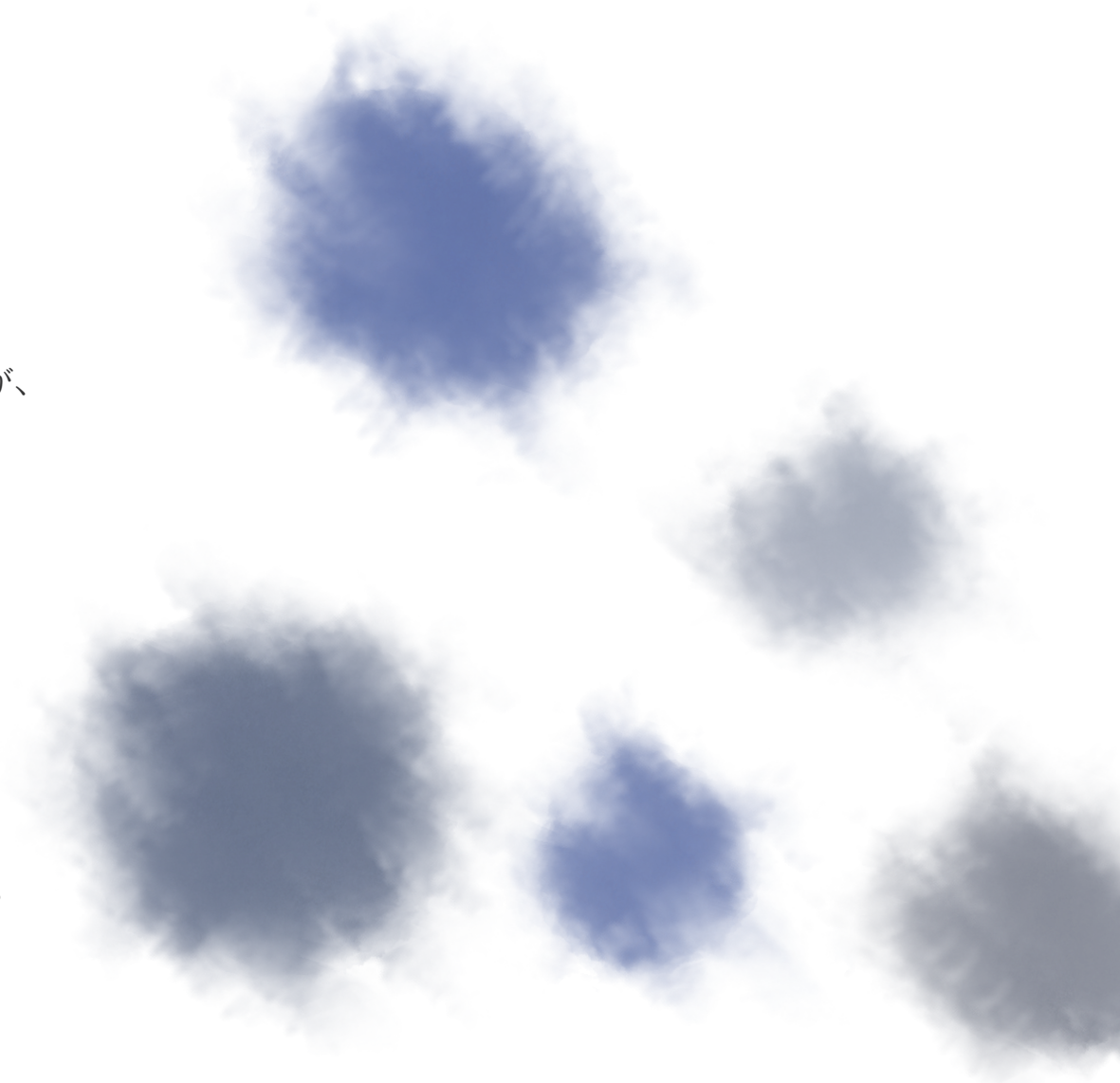
お医者さんは必死に手当てをしていましたが、
手を止めて

「 はぁ 」

とひとつ、ため息をつきました。

「 手遅れだったようです。
　いま 亡くなりました 」

スズは わーんと大きな声で泣き出しました。
それにつられて みんなも泣き出しました。



コン吉は おそるおそる たずねました。

「 どうして こんなことになってしまったんでしょう… 」

お医者さんは ちょっと考えて
それから 暗い声で言いました。

「 もしかして 人間の食べ物を
　食べていたのではないですか 」

コン吉とスズは顔を見合わせて
人間がお菓子を投げてよこした日のことを
思い出しました。

「 私たち動物が人間の食べ物を食べつづけると
　体が弱くなって病気にかかってしまうのです 」

コン吉一家は 泣きながら
人間の食べ物は もうぜったいに食べないことを
約束しました。

第二章

夏が始まりました。

一家は 元気をとりもどして暮らしていました。

長男のコン太は
花冠をつくったり 森を探検したりして
毎日 毎日 ハルちゃんと仲良く遊んでいます。

すると…

「 ハル！何やってるの !! 」

女の人があわてて走ってきました。
ハルちゃんのお母さんです。

「 キツネと遊ぶなんて なんてことしてるの !!
　やめなさい！ほら、帰るわよ！」

「 コン太ちゃん！もっと遊びたいよ〜
　いやだ〜〜 」

ハルちゃんは お母さんに手を引かれて
行ってしまいました。

次の日から
ハルちゃんは遊びに来なくなりました。

とつぜん ハルちゃんに会えなくなって
コン太は とっても悲しい気持ちです。

「 ハルちゃんのお母さん すごく怒っていたな…。
　ぼく 何か悪いことしたのかな… 」

「 ぼくがキツネだから
　人間のハルちゃんと遊んじゃいけないのかな 」

妹のランは 人間にもらった食べ物のせいで
死んでしまったのを思い出しました。

「 人間は悪い生き物なのかな ？
　でも ハルちゃんは優しくて すてきな子だし… 」

コン太は 毎日そんなことを考えて泣いていました。

今夜もひとり 泣いていると

「 なやんでいるのだね、キツネの少年よ 」

急に話しかけられました。
よく見ると 闇の中に1羽のフクロウがいました。

「 あなたはだれ？」

コン太は たずねました。

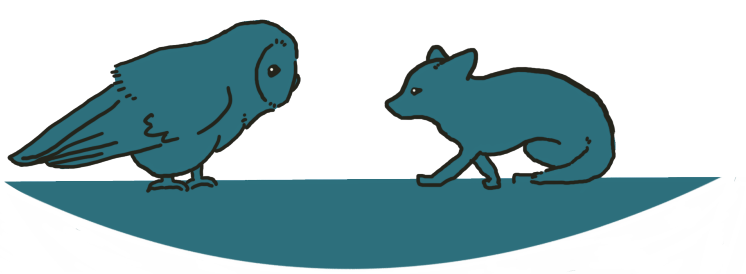
「 わたしは ただのフクロウさ。
　散歩していたら 君の泣き声がきこえてきてね。
　何があったんだい？」

コン太は これまでのことを話しました。

「 ホゥ…そうかい。
　それはざんねんだったねぇ 」

フクロウは優しくうなずいて きいてくれました。

「 どうして こんなことになっちゃったんだろう。
　ぼくはただ ハルちゃんと
　仲良くしたいだけなのに… 」



すると フクロウが意外なことを教えてくれました。

「 ホゥ…それはな、少年。
　悪いムシのせいさ 」

「 ムシ？ 」

「 そうさ。
　おまえさんたちキツネの おなかの中には
　悪いムシが住んでいることがあるんだ。

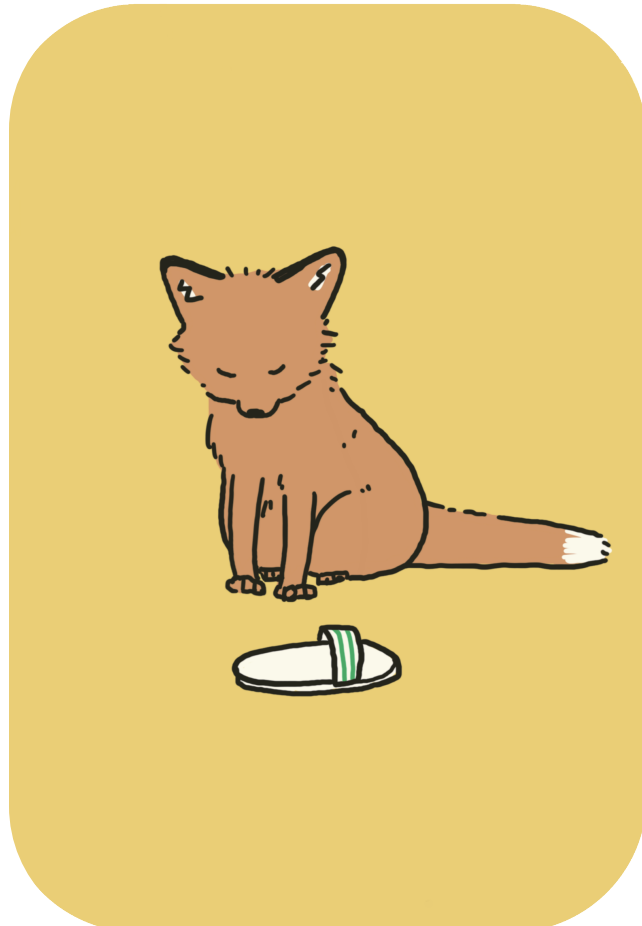
　そいつは キツネには悪さをしないが
　人間には病気を引き起こす。

　だから ハルちゃんのお母さんは
　ハルちゃんを君から遠ざけたのさ 」

ハルちゃんのお母さんは
ハルちゃんを守りたかったのでした。

「 そうだったんだ… 」

コン太は ハルちゃんのサンダルを
じっと見つめていました。



ハルちゃんも
コン太に会えなくなって寂しく思っていました。

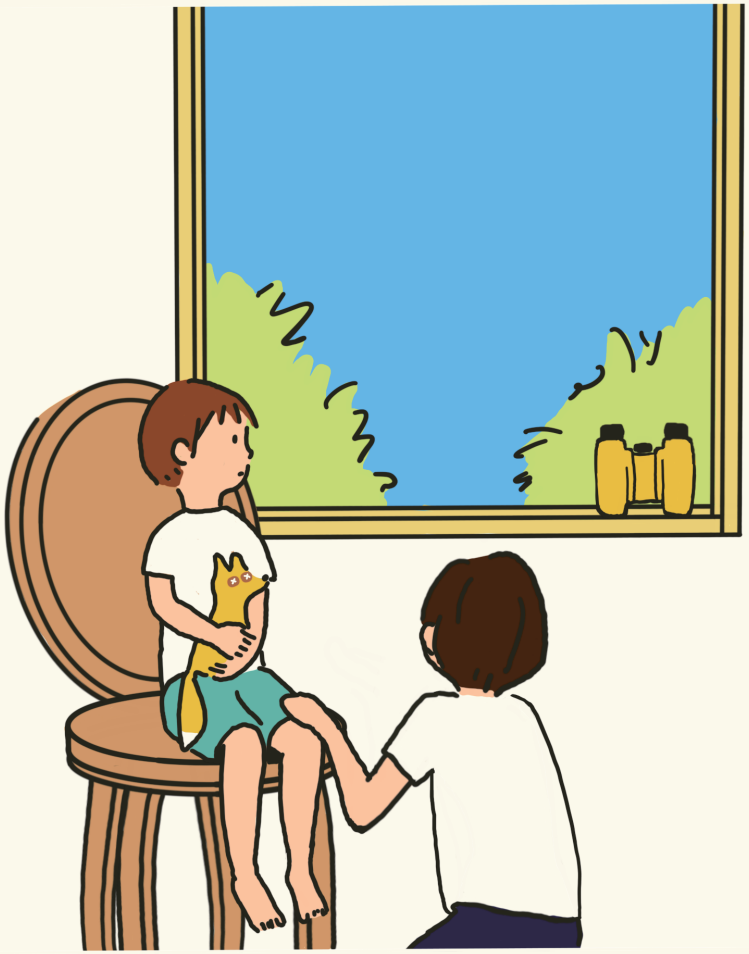
毎日 コン太に会いに行きたがるハルちゃんに
お母さんはゆっくりと話しはじめました。

「 ハルちゃん、キツネと人間は
　仲良くなりすぎてはいけないのよ。

　おうちの中に住んでいる人間と違って
　キツネは外の世界で暮らしているの。
　キツネは平気でも 人間にうつる病気を
　もっていることもあるのよ 」

「 うそだぁ。
　コン太ちゃんと ずっと遊んでいたけど
　ハル、風邪もひかなかったよ。平気だよ！」

コン太と遊ぶことを許してほしいハルちゃんは
必死に反論します。



お母さんは うなずいてから 話を続けました。

「 たとえばね、
キツネのうんちには 小さな虫の卵が入っているの。
それが人間の体に入ると
何年もたってから病気になってしまうのよ。
知らないうちに ひどくなってしまうの。

…ひいおじいちゃんもね、
その病気で死んじゃったのよ 」

と 窓の外をみつめて言いました。

ハルちゃんは 自分も ひいおじいちゃんのように
病気になってしまうのかもしれない と
だんだん怖くなってきました。

「 どうしたらいいの？」

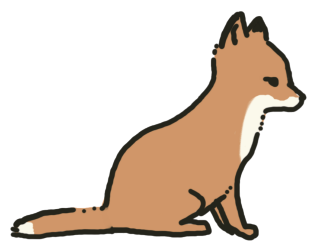
怖がるハルちゃんに
お母さんが優しく答えました。

「 キツネさん、今日も元気かな？って
　遠くから見守ってあげましょうね。
　それから 外から帰ったら ちゃんと手を洗うこと。
　木の実なんかは よく洗ってから食べること。
　これができていれば十分よ 」

それをきいて ハルちゃんは安心しました。

でも
もう明日から コン太とは遊べないのです。

ハルちゃんは もう片方のサンダルを
黙って見つめていました。



それからは　　ハルちゃんと　　コン太は　　会わないままでした。

ふたたび 札幌に秋がやってきました。

子ギツネたちは すっかり立派な大人のキツネに
成長しました。

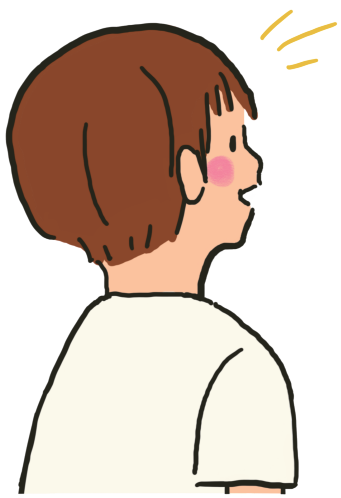
今日は 長男コン太の旅立ちの日です。

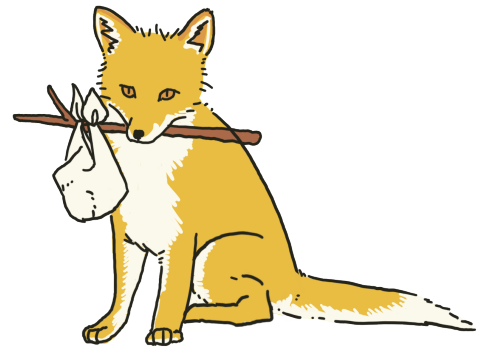
お父さんのコン吉が ひとりでこの街に
やってきたように
コン太も これから 自分のおうちと
お嫁さんをさがすための旅に出ます。

コン太は 最後に一度だけ
ハルちゃんの家に行きました。

ハルちゃんは庭にいました。

コン太は 少し離れたところから声をかけました。





「 ハルちゃん、
　ぼくは大人になったんだ。
　だから遠くへ行くよ。

　キツネと人間は友達にはなれないんだ。
　でも 楽しかったよ。
　ずっとずっと 元気でいてね 」

そう言って コン太は走っていきました。

ハルちゃんは 追いかけませんでした。
そのかわり 口をぎゅっと結んで
大きく手をふりました。

あれから 何度目かの春が来ました。

ハルちゃんは6年生になりました。
今日は学校のお友達とハイキングに来ています。
お弁当を食べていると
茂みから ひょこっとキツネが顔を出しました。

「 キツネだ！」

お友達が言いました。

「 ほんとだね。かわいいね。
　キツネさん、今日も元気かな 」

ハルちゃんは 嬉しそうに言いました。

キツネは 黄色いしっぽを くるんとひるがえして
どこかへ走り去っていきました。

ハルちゃんと お友達は 森のお花をつんで
そして アカツメクサの花冠をつくりました。

絵本

「キツネが友達だったころ」

2021年 3 月 30 日　初版第一刷 発行

発 行　池田貴子
北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）特任助教

文･絵　石川芳夏・藤田諒子 （五十音順）
北海道大学科学技術コミュニケーション教育プログラム（CoSTEP）16期受講生

監 修　池田貴子

本書は、科学研究費助成事業（課題番号:JP19K14339, 研究代表者:池田貴子）の助成によって発行されました。